様　式　Ｃ－４１

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：奨励研究
研究期間：2022～2022
課題番号：２２Ｈ０４０８０

研究課題名　　幼児期のレジリエンスを育む環境・援助と評価の在り方ー協同的な運動遊びを通してー

研究代表者
中山　芙充子（Nakayama, Fumiko）

広島大学・附属三原幼稚園・教諭

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　190,000円

研究成果の概要：本研究では,幼児期の「レジリエンス」を育成する環境・援助と評価方法について明らかにすることを目的とした。この目的を達成するために,環境・援助として,５歳児の協同的な運動遊びに焦点をあててチーム戦など協同的な活動を行った。評価方法としては,エピソードを基にした小学校教員とのカンファレンスとルーブリックに基づく評価方法を開発した。その結果,本実践を通して幼児の「レジリエンス」の基礎となる資質・能力（コラボレーションする力）の高まりについて質的・量的の両側面から明らかにすることができた。また,カンファレンスを基に,幼小接続期で大事にしたい環境・援助の在り方についても新たな提案をすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
協同的な運動遊びにおいて,失敗と成功の過程でレジリエンスの基礎となる資質・能力の高まりが見られた。このようなレジリエンスの育成は,予測困難な時代を生きていく子どもたちには,将来の幸福感を高めるために非常に重要である。評価方法は,エピソードを基にした小学校教員とのカンファレンスとルーブリックに基づく質的・量的の両側面を開発した。このことは,主観的な子ども理解にとどまらず,客観的な評価につながり,幼児の発達や教育に関わる新たな洞察が可能になると考える。また,幼小接続期にレジリエンスを育むための具体的な環境・援助を明らかにしたことは,資質・能力を柱とした幼小の学びの連続性の研究に応用できると考える。

研究分野：教育学

キーワード：幼児期のレジリエンス　5歳児の協同的な運動遊び　コラボレーションする力　小学校教員とのカンファレンス　質的・量的評価

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究の目的

本研究は,協同的な運動遊びを通して幼児期の「レジリエンス」を育成する環境・援助と評価の在り方を明らかにすることを目的とする。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大など予測困難な時代を生きていく子どもたちにはストレスを受けても,それにめげることなく現状を打破していく「レジリエンス」が求められる。「レジリエンス」の基礎となるものは,幼児期から育まれるものであり,「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」（文部科学省,2018）にも重要性が示されている。

幼小中一貫を特色としている本学校園は,2018 年度から高度に競争的でグローバル化された多様性社会に適応するために求められる「レジリエンス」の基礎となる資質・能力（粘り強く取り組む力・コラボレーションする力）の育成をめざし,12 年間一貫カリキュラムの開発を行ってきた。その中で,幼児期の様々な遊びの中でも,運動遊びを通したレジリエンス育成の有効性が明らかになった。特に縄跳びや上り棒など,目標がはっきりしている運動遊びでは,達成した数の見える化などの環境構成により,自分の目標に向けて粘り強く取り組む力の向上が観られた。一方で,鬼ごっこやドッジボールなど友達と一緒に協同で行う運動遊びでは,友達と思いが通じ合わないと,すぐに諦めて次の遊びをしようとする姿などが見られ,コラボレーションする力の育成に課題が見られた。

そこで,本研究では,５歳児の協同的な運動遊びに焦点をあて,チーム戦や作戦会議など協同的な活動を充実することで,友達と思いを伝え合いながら課題解決に取り組む保育を実践する。また,「レジリエンス」の基礎となる資質・能力についてルーブリックを作成し,エピソード記録のカンファレンスとともに分析評価することで,幼児期における「レジリエンス」の評価方法を明らかにする。この評価をもとに,幼児期にどのような「レジリエンス」が育まれているのか,またそれらを導き出す環境・援助について明らかにしていきたい。

２．研究成果

（１）評価方法として,エピソードカンファレンスにおける質的評価だけでなく,ルーブリックに基づく量的評価を新たに取り入れ,質的・量的両面の評価方法を開発した。

①幼小教員合同のエピソードカンファレンスにおける評価

協同的な運動遊びでレジリエンスが育まれている場面をエピソード記録におこし,幼稚園・小学校の複数教員でカンファレンスを行う。これを,５月と１１月に行い,資質・能力が育てられているか,そのための環境・援助について考察した。

②ルーブリックに基づく評価

レジリエンスの基礎となる資質・能力（粘り強く取り組む力・コラボレーションする力）について,５歳児の協同的な運動遊びの様子から一人一人を資質・能力ごとの尺度に照らし合わせて３段階（３＝能力が育まれている,２＝能力が育まれつつある,１＝能力が育まれていない）で評価した。その際,数値だけでなく,その根拠となるエピソードを書き加えることとした。これを５月と１１月に行い子どもの変容を考察し,効果を検証した。（表１）

表１　コラボレーションする力に係る尺度

コラボレーションする力		
尺　度	評価	評価を裏付ける子どもの姿（エピソード）
いろいろな相手（同年齢，年下の異年齢など）に対して相手に分かりやすいように，言い方を考えたり身振りや手振りを交えたりして根気強く伝えたり，相手の思いを聞いたり，意見を取り入れたりしながら遊んでいる。	3	
気の合う友だちや教師など親しみをもった人に対して，自分の思いを言葉やしぐさ，表情や身振りなど自分なりの言い方で伝えたり，相手の思いを聞いたりしながら遊んでいる。	2	
ひとりごとなど，思いを自分なりに表現しているが，他者に伝えようとしない。	1	

（２）レジリエンスの基礎となる資質・能力（コラボレーションする力）の変容

課題であったコラボレーションする力については,評価３が１３％増加しており,友達の意見を取り入れながら協力して遊びを進める姿が増えてきている。（表２）協同的な運動遊びでグループでの作戦会議やトラブルが起きた際の話し合いを積み重ねる中で,５月には涙が出て伝えられない姿や自分の都合のよいようにルールを作ろうとする姿も見られたが,次第に相手の意見に耳を傾け,意見を取り入れながらルールを作る姿が見られるようになっていった。

また,まとまった活動で行ったドッジボールなどの運動的な遊びを,好きな遊びの時間でも子どもたちが誘い合って主体的に行う姿が見られた。その際,異年齢の３歳児が興味をもち参加してくると,３歳児に優しくルールを教えたり,３歳児も楽しめるような特別ルールを作ったりなど,年下の相手のことを考えて行動する姿が見られた。

表２　コラボレーションする力の変容

資質・能力	評価	１１月	１１－５月
コラボレーションする力	３	５１％	１３％
	２	４９％	－１１％
	１	０％	－２％

（３）レジリエンスを育成するために大事にしたい教師の援助

「レジリエンス」に関するエピソードをもとに幼稚園教員と小学校低学年教員が合同で保育カンファレンスを行うことで,以下のような幼小接続期で大事にしたい教師の援助が明らかとなった。

①幼児なりの当事者意識が身につくことを大事にする

運動遊びでは,あえて細かくルールを決めずに始めることで,困ったことが起こった時に,自分たちで意見を出し合いながらルールを作り出すなど,自分のこととして考える姿が見られた。このように,遊びや活動,園生活の様々なことを教師が決めたり予定通りに進めようとしたりするのでなく,子どもたちが話し合って決める権利を保障するようにする。自分たちで決めたことをやっていくことを支えていくことで,教師任せではなく,自分のこととして取り組む経験を積み重ねられるようにして,幼児なりの当事者意識が身につくことを大事にする。

②失敗体験と成功体験の繰り返しを大事にする

運動遊びをする中で,子どもたちは何度も失敗しながら次は失敗しないためにはどうしたらよいか試行錯誤したりルールを考えたりして学んでいた。その中で,失敗体験と成功体験を積み重ねることが,子どもの自信につながり,「こうすればいいんだ,諦めなければできるんだ」と思える幼児期なりのレジリエンスが育まれていった。

このことから,まずやりたいことを膨らませた上で,うまくいかない体験も大事にしていく。すぐに諦めるのでなく,自分（たち）の力で取り組む事で解決したりうまくいったりする経験を大事にしていく。そのために,見守ったり,一緒に考えたり行ったりする援助を行っていく。

また小さいことでも,自分のやりたいことを見つけてそれをやり遂げる成功体験をもてるように援助していく。そのことで,意欲や有能感が高まることを大事にする。

③友達に思いをぶつける体験が手応えのあるつながりとなる過程を大事にする

協同的な運動遊びでは,３～５人の少人数でのグループ活動を何度も取り入れた。始めは,思いがぶつかり合って自分の思いを押し通そうとしたりその場から離れたりする姿も見られたが,次第に思いをぶつけ合いながらも,折り合いをつけて,協力する姿が見られていった。このような過程では,過剰に相手に合わせたり気を遣ったりするのではなく,まずは相手に自分の思いをぶつけていくことができることを大事にした。そのことで,子どもたちは,自分の思いを出しても大丈夫なのだ,思いは伝えた方がいいのだということを感じられるようになっていった。このことからも,友達と一緒に遊びや生活をつくっていく際には,安心して思いを出し合える関係をつくった上で,共通のめあてに向かって本音をぶつけ合いながら話し合い,そこから協力していく関係ができるようになることが大事である。

以上のように研究をすすめる中で，子どもの姿の変容から，５歳児は，同年齢との協同的な活動で思いをぶつけ合い折り合いをつける経験をし,そこで身に付けたコラボレーションする力を年下の異年齢とのかかわりの中でも発揮していくことが分かった。また,協同的な運動遊びでは,子どもたちは自分の役割や貢献の重要性を理解し,成功体験を積む機会を得ることで,認められる喜びを感じ,自信を持って困難に挑戦する姿が見られるようになっていった。このことから，予測困難な現代だからこそ，幼児期からレジリエンスを育む環境構成やそれを支える教師の援助の重要性を改めて実感することとなった。

今後も幼児のレジリエンスを育む環境・援助について,幼小接続など様々な角度から探究していきたい。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名